

⑫ 建昌大夢死去

大正九年以來本校彫刻科塑造部教授として指導にあたつた帝國芸術院会員の建昌大夢は昭和十七年三月二十二日、日暮里渡辺町の自宅で肺気腫のため死去した。前年に門下生とともに直土会を結成したばかりであった。彼は彫刻界の元老として官展に重きをなし、餘技として俳句を能くした風流人でもあつた。告別式は二十五日に滝野川区田端町興楽寺で行われた。

⑬ 岡田三郎助記念像

昭和十七年四月二十九日、校庭で故岡田三郎助記念像除幕式が行われた。制作にあたって中心的役割を果たしたのは田辺至（浮彫り制作者）と朝倉文夫（監修者）であつた。同十六年一月二十六日付『東京朝日新聞』には建設計画段階の状況が次のように報じられている。

恩師のレリーフ

美校内に岡田三郎助畫伯の像 美術界總動員で計畫

上野の東京美術學校々庭には同校と深い関係のあつた物故教授の胸像が建てられてゐる、丁度明治、大正の美術界を代表する人、我が現代美術育ての親を網羅してゐるかの様に岡倉天心、高村光雲、竹内久一、石川光明、大村青崖^{〔西〕}、黒田清輝、橋本雅邦、寺崎廣業、川端玉章、久米桂一郎、海野美盛、海野勝珉諸大家在りし日の姿が青年美術家をじつと見つめてゐる、この胸像群の中へ去る昭和十四年世を去つた故岡田三郎助畫伯の像が近く門弟、

関係者の熱意で建てられることになり、然も、洋畫界の大先輩の記念像は洋畫家の手で」と云ふ全く新しい試みの下に計畫が進められてゐる

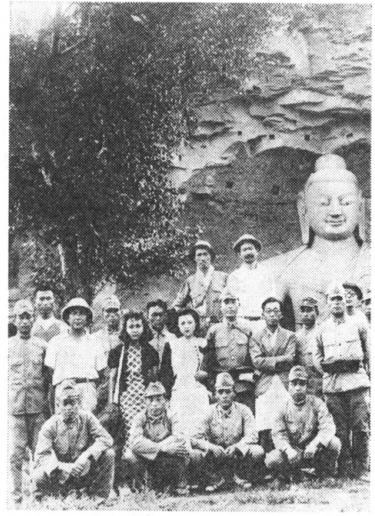
故岡田畫伯と美校との關係は、明治二十九年以來世を去るまで四十數年間の教鞭生活でも知れる極めて深いもの、その間現洋畫壇に名を列らねる畫家達の大多數は岡田畫伯の警咳に接してゐる、そこでこの記念像建設計畫も藤島武二、和田英作、和田三造、中澤弘光、南薰造、辻永、田邊至、太田三郎、中村研一、北蓮藏諸畫伯を初め十數氏の實行委員以下發企人は百數十氏に上る美術界總動員である

かくて來る四月、美校内に事務所を置いて愈建設に着手して本年内に除幕式を行ふ豫定だが、時節柄多量の銅を要する胸像は止めて故畫伯も好んでゐた上、時には自ら制作もした薄肉彫^{レリフ}とし、實行委員中の一アトリエを中心にして制作、更に深い關係のあつた洋畫家達が全員協力して、一指宛でも恩師の像を作る手となつて完成させたいとの意見が有力になつて來たので、美術界初めての美しい試みが岡田畫伯の記念像を完成させるのではないかと云はれてゐる

除幕式当日、建設委員会總代辻永から本校へ右記念像が寄贈された。

⑭ 西田正秋の海外出張

昭和十七年夏、助教授西田正秋は中華民國その他への出張を願ひ



第20洞前にて 昭和17年 後列2人のうち右西田正秋、左石塚軍治、中列右より1人おいて各務満、2人おいて水野清一、1人おいて李香蘭、1人おいてその妹、1人おいて大同炭鉱総務部長、兵士は北支泉5310部隊員 (各務満氏提供)

出て許可された。左記はその関連文書（昭和十六年職員関係書類）よりの抜粋である。

御願

今回文部省精神科学研究奨励金ノ交付ヲ受ケ本校ノ命ニヨリ来ル七月一日ヨリ九月廿日マデ三ヶ月間北支、蒙疆、満鮮方面ノ古美術研究調査ニ出張致ス事ト相成申候ニツイテハ左ノ件御許可ノ上然ルベク御取計ヒ賜リ度此段御願申候也

私儀

一、補助員二名同行ノ件

各務満

昭和十六年三月本校木彫部卒業
〔現在工藝技術講習所生〕

石塚軍治（現在本校塑造部四年生）

一、右出張研究ニ必要ナル証明書御下附ノ件

甲、実地研究ニ必要ナル証明書 三通

（右ハ各自一通宛最後マデ所持スルモノ）

乙、旅行事務ニ必要ナル証明書五十通

（右ハ必要ニ応ジ各官廳等ニ提出スルモノ。提出先ハ

帰京後全部御報告ス）

一、右出張研究ニツキ便宜供与ノ依頼状御発送賜リ度件通

以上

（右ノ宛名ハ一々別紙御報告ス）

昭和十七年六月一日

助教授 西田正秋〔印〕

東京美術學校長澤田源一殿

出張研究ニツキ便宜供与ノ依頼状御発送賜リ度諸官廳宛名

西田 正秋

一、興亜院文化部第二課

麹町区隼町一三

二、陸軍大本営報道部（黒田千吉郎中尉）

麹町区永田町

三、蒙古政府駐日代表部

麻布区廣尾町一四

四、大同石佛保存協賛会

蒙疆大同晉北政廳内

五、医博吉田璋也（新民会中央總會専門委員、北支派遣軍司

令部囑託）自宅 北支北京西域豊盛胡同十号旁門

六、興亜院文化部

蒙疆張家口

七、蒙古政府

蒙疆張家口

八、大同大日本帝國領事館（領事）

蒙疆大同

九、北支派遣第五三一〇部隊副官稻毛讓中佐

一〇、蒙疆大同晉北政廳次長森井雄次郎

一一、滿洲國奉天市國立博物館長尊田是

一二、滿洲國熱河省承德 滿洲第八八一部隊

一三、滿洲國熱河省承德 重修工務所 伊東裕信

一四、閔東州 旅順博物館

一五、朝鮮京城府 總督府博物館

一六、〃 李王家博物館

一七、慶尚北道慶州郡慶州面

總督博物館分館 大坂金太郎

一八、平壤博物館長 小泉顯夫

一九、京都市左京区北白川小倉町五〇

東方文化研究所（水野清一）

追加

二〇、興亞院華北連絡部

北支、北京内三区倉南胡同一号

携行品證明書（案）

東京美術學校助教 西田 正秋

補助員 各務 滿

補助員 石塚 軍治

右者今般學術研究ノ爲出張ヲ命シタルニ付ソノ研究調査ニ必要ナル諸器具及材料トシテ左記ノ物品ヲ携行セシメタルコトヲ證明ス

一、寫眞機一臺（ウエルターペルレ、プロローニー型、レンズ六

三）

一、同フィルム プロローニー判 四十五本

一、石膏像採取材料及用具一式

一、拓本採取材料及用具一式

一、測定用具一式

一、寫生用材料及用具一式

一、其他研究調查用材料及用具一式（モデリングコンパウン

ド、解剖器具其他）

昭和十七年七月二日

東京美術學校長 澤田 源一

一行に加わつた各務滿氏に、編者は次のような話を伺つた（平成六年四月）。

西田正秋は雲崗石窟彫刻の様式の変遷について独自の研究を意図していた模様で、昭和十六、十七、十八年と三回雲崗に赴いた。第一回目は友人二人と、第三回目は単身で出掛けたが、第二回目は各務氏と石塚（のち安藤と改姓）軍治を伴い、公務としての出張であった。第二回目のところまではまだ治安もそれほど悪くはなかつたが、第三回目ときは相当困難な旅であつたらしい。

十七年夏、西田隊三名は先ず北京へ行き、医師で民芸研究家の吉田璋也のもとに四、五日滞在してから列車で大同へ向かつた。大同

には西田が前年利用した曹洞宗の寺（当時住職松井絶巖）があり、ここに寄寓し、軍用トラックで雲岡へ行った。

雲岡石窟のあたりは、地方軍閥が行き来したり対戦があったりし、また、住民が石窟のなかで豚や鶏を飼っていたりしたため荒れ放題だったが、十七年当時は大同の泉五三一〇部隊から派遣された守備隊（福田隊）が駐屯して軍事上の警備と文化財保護にあたった。……ここにあるものを一木一草たりとも持ち出す者は銃殺に処す」云々という厳めしい看板が建てられ、一般の立ち入りは禁止されていたのである。守備隊は十二名くらいいて、その警備のもとに水野清一、長広敏雄の率いる東方文化研究所の調査隊十数名が調査を続けていた。そこへ西田隊が到着したわけである。

守備隊は石窟近くの民家数軒を宿所とし、夜間はその回りを移動式の鉄条網で囲んで二頭の大きな軍用犬に番をさせていた。西田隊はそこから少し離れたところにあつた僅か二間の民家を宿所とした。夜間は一応守備隊の警備に守られて休んだわけだが、守備隊宿所に用足しに行くと獐猛な犬が吠えかかるので、これには閉口した。戦況は緊迫しつつあつたとはいえ、西田隊が滞在した約一カ月の間、守備隊が出動（ただし二、三名）したのはたった一度だけで、概ね平穩であつた。

かくて西田隊は、東方文化研究所調査隊が作業をする傍らで毎日石窟の仏像の型をとったり写真撮影をしたりした。各務氏は水野精一の精力的な仕事ぶりに感動したという。型を取るには日本から持って行ったモデリング・コンパウンドを用いた。これは歯医者が歯の型を取るのに使っているもので、湯で温めては像に押しつける。

出来た型は大同の寺に運んで、その庫裡で石膏像にするのであつた。石窟の高いところは調査隊の組んだ櫓を利用して貰い、普通は見られないところの像も型取りした。十八洞のエキゾチックな骨格が特徴的な大迦葉マヘーシャの首には一番時間をかけた。多数の石膏像が出来たが、東京芸大の図書館に掛けてある美しい仏像の顔（第十九洞東脇洞菩薩頭部）もその中の一つである。

その年は例年になく雨が多く、草木は繁茂し、珍しい動植物に目を奪われることもあつた。一行が滞在中にいろいろの学者が同地を訪れたが、福田平八郎、杉山寧、浦田正夫ら画家たちの来訪もあつた。あるときは李香蘭が慰問に来て、皆と記念撮影した。

石窟の調査を一応終えたとき、西田は家人の病気で急遽帰国を余儀なくされた。残つた各務氏と石塚は計画どおり旅行を続けることになり、先ず熱河省の承德へ行った。ここには伊東忠太の息子でラマ寺院の研究をしていた伊東裕信がおり、各務氏らはラマ寺を見学した。それから奉天へ行き、博物館で先輩の上原之節に会つた。博物館には羅振玉の息子がおり、上原はそのパートナーとして実権を持っていた。また、旅順、平壤の博物館へも行った。やがて石塚も病気で先きに帰国し、各務氏は一人で旅行を続け、十七年十一月末に帰国。西田助教教授に資料を提出し、委細の報告を了えた。

西田は調査の成果をまとめて発表する予定であつたが、一部を「雲岡の巨像群」として『生活美術』第三巻第一号（昭和十八年一月）に発表したのみで、資料の殆どを膨大な書籍もろとも戦災で失つた。